

今日の聖書のことば

5月31日(日) ロマ 8章

ここにはキリスト者の救いの確かさが、神の側の御業に結びついて語られている。いつでも私たちの救いは、神によって支えられている。神の愛の深さは、御子を惜しまなかった事実で確証されている。

6月1日(月) ロマ 9章

神の御心と人間の考えとは違う。人間の考えによって、神の考えをはかろうとするときに、いつも間違いが起こる。聖書の教えの根本には、神の創造主性と、私たち人間の被造物性と言うことがある。

6月2日(火) ロマ 10章

宣教することは、キリスト者たちにとって義務である。同時にそれは内側から起こってくる熱情でもある。宣教がなければ決して人は救われることはない。この働きに従事するのは一部のキリスト者ではなく、全キリスト者である。

6月3日(水) ロマ 11章

神の救いと選びとは恵みによるのである。だからその特権は甘んじていたイスラエルにではなく、神が恵みのよって選んでおられたが救われた。神は御心ならば、どんなものでも救うことがおできになる。

6月4日(木) ロマ 12章

救われたものには変化が起きる。救われたものが愛の実践を行うためには、献身がなされなければならない。愛の実践は神の教会の一員としてキリストかしらと仰ぐ体の一員と言う意味で、むしろしぜんの奉仕と言うべきです。

6月5日(金) ロマ 13章

私たちは社会の一員としてその秩序に従うのは、神が秩序の神であり、神がすべての秩序を守っておられるからである。私たちが上の権威に従うのも同様である。上に立つ権威が神に従おうとしない場合は、その義務から解かれる。

6月6日(土) ロマ 14章

私たちは何をしてもよいと感じても、弱いキリスト者がそれによって良心に痛みを覚えることがあるかも知れない。そうした人を決して軽蔑してはならない。仲間のキリスト者に負担をかけるより、自分の自由を制限する方がよい。

ろば No. 1969

2020年 5月 31日
日本バプテスト立川キリスト教会
牧師 大川 博之

コリント一 12:3

ここであなたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、誰でも「イエスは神なら見捨てられよ」と言わないし、また聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

新型コロナ・ウイルス感染対策で、私たちは教会活動を休止してきました。ようやくこのペンテコステ感謝礼拝で、一緒に礼拝を守ることが出来、本当に感謝で喜びです。私はイエスの弟子たちが、主イエスが十字架に付けられ亡くなられてから、どれほどの失意と悲しみの中にあつたかを、思い起こさせていただいています。しかし彼らは主の言葉を信じて祈り待ちました。確かに、十字架につけられ亡くなられたイエスが、復活されて彼らの下に來られて、「平安あれ」と言葉をかけていただきましたが、将来を思って故郷に帰り、漁師に戻ったこともありました。

その彼らが、イエスを天に送ってから都に集まり、一同は主イエスの約束を待つて祈り会を持ちました。彼らには明確な確信がありました。主イエスの教えと行動は、しっかり彼らに受け継がれていました。神さまはどのようなことがあろうとも、寄り頼んでくるものと共にいて下さいます。

ペンテコステの朝、神さまはその約束を果たして下さり、弟子たちの上にイエスが「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。この方は、真理の霊である。」(ヨハネ 14:16-17)と言われたように、聖霊が降り、彼らは力を与えられ、彼らは大胆にイエスの福音を語り始めました。イエスの福音を、です。それはイエス・キリストによって与えられたいのちの平安です。罪に生きる私たちに平安はありません。「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、私たちの主イエス・キリストによる永遠のいのちです」(ロマ 6:22)。

ペンテコステの日にペテロがした説教(使徒言行録 2:14-36)は人々の心をえぐりました。「人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペテロとほかの使徒たち

に、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」(使徒言行録 2:37)と言ったのです。神の御業を行われたイエスを「あなた方は殺してしまっただけです」とペテロは責めました。しかし、主イエスが十字架上で死なれたのは、神のご計画の中でありました。しかし、死は神が選ばれた救い主を止めておくことは出来ませんでした。そこでペテロは詩篇 16 篇の聖句を用いて説明をしました。キリストは今、神の右におられます。聖霊を注いでおられるのは、主イエスご自身にはほかなりません。

この福音の伝播をとどめ置くことは出来ませんでした。瞬く間に、エルサレム教会への迫害で散らされていったクリスチャンたちによって世界に広がりました。

パウロはコリント教会の人たちへ「ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです」(コリント 12:3)と語ります。私たちの信仰もここにあります。私はこの教会活動休止の間、神さまは何を私たちに求めになってお出でなのだろうかと考えました。今日まで世界で、悲しい出来事が起こるたびに、人間の罪に発しないものはありませんでした。今日の苦悩もここにあることは明らかです。私たちはしっかりと主と向き合うことを通して、力をいただくのです。必ず解放して下さい。条件は一つです。すべてを主に、創造の神を信じてゆだねることです。私たち自身にはその確信はありません。だから主の助け、支えが必要です。主イエス様です。イエスは言われます。「はっきり言っておく。信じる者は永遠のいのちを得ている」(ヨハネ 6:47)と。この告白は聖霊によるものです。ペンテコステの日、人々はペテロの説教を聞き、心を刺されて、罪を悔い改めて復活の主と生きるものとされました。あなたの心に主が迫られています。「イエスは主である」と告白するときすべては私たちのものとなります。

..... < 聖書の学び・祈禱会 >

主に倣う者になっている テサロニケー 1 : 1-10

- * 聖書箇所を声を出して読む。
- * 聖書から教えられたことを、30文字で書き留める。

迫害に直面して苦闘しているテサロニケの人たちを、勇気づけるパウロの言葉に私たちはパウロの思いを聞きます。

彼らが迫害の苦しみの中にあって、「信仰によって働き、愛のために労苦し」「希望を持って忍耐」してきました。「あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。」彼らはイエスに倣う者でした。ただ「真似ること」でなく、その生き様を踏襲しようとしてきました。「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」(7イリ 3:10-11)。神を愛し人を愛して、十字架の死に至るまで従順であられたイエスに倣う、パウロの生き様こそその模範でした。

